視点

ゆるトークACPのススメ ～日常生活の中でのACP～

執筆▶マキプ（見浪真樹）PCPセンター（Person Centered Planning）代表

2022年に実施した厚生労働省の調査※1で、ＡＣＰ（アドバンス・ケア・プランニング）を「知らない」と回答した一般国民の割合は72.1％。一方で、自身の祖父母の看取りからＡＣＰの必要性を実感し、一般市民に向けて書籍の発行やイベントを通してACPの普及・啓発活動を実施してきたPCPセンターのマキプ（見浪真樹）さんは、ＡＣＰの必要性を感じている人が増えているのを肌で感じている。「本当のＡＣＰは日々の生活の中にある」というマキプさんが、いち市民という立場から、地域でのＡＣＰを語り合う場を紹介する。

家族としての看取り経験から、終末期医療について思うこと

私は、介護職や医療職とは関わりのない一般市民という立場でありながら、2018年より、市民を対象とした無料の終末期医療イベントを開催してきました。市営の大きなホールで、在宅での看取りを描いた映画を上映したり、在宅医や訪問看護師にお話しいただいたり、途中に生演奏で一息入れたりと、毎回、精魂込めて作り上げてきました。

目的として掲げるのはＡＣＰの文字。ですが言葉よりも大切なことを伝えたい。それは、何故こうした会をするのかという理由にあります。

2014年の春、祖父が入院するまで私は終末期や看取りについて考えたことはありませんでした。医療も介護も関わりのなかった当時の私は、祖父が拘束手袋をはめられた姿にひどくショックを受けました。誤嚥性肺炎のため食事が止められ、点滴の管が足の付け根から挿入されていたため、それを抜かないための対策だと聞かされました。祖父自身、頭はしっかりしており意思は明確に伝えます。お腹がすいた。手袋を外してほしい。家に帰りたい。本人の望みが何一つ通じない状況になってしまったのです。

拘束手袋は安全のためであり、患者の命を守るためであり、看護師の数が少ないので仕方がないことであり、日本全国で一般的に行われている処置である。と、ネットで調べて知りました。……ただ、これが普通だから我慢しなければならないのか？ 病院とはそういう場所なのか？ 疑問に感じました。

過去、障害者に携わる仕事をしていたことのある私は、尊厳や人権に触れる事柄に関して人一倍敏感だったのかもしれません。ですが、本人の辛さを想像すると夜も眠れず、なんとかならないかと熟考しました。医師と話し合いの結果、拘束手袋を外し、つなぎの拘束服を着用することになりました。拘束服も「拘束」には違いありませんが、手指を自由に動かせるという状況は、本人にとって全然違います。

その後祖父は転院先の病院でポートを埋め込む手術を受け、人工呼吸器を装着して帰宅し、18日後、家で息を引き取りました。

その出来事により、私は病院での終末期医療に不信感を抱くようになりました。高齢者が入院すると寝たきりになって弱ってしまう現状があり、高齢者の発言は無視され、高齢者の願いはどこにも届かず、叶わない。とても恐ろしいと感じ、私は日本の終末期医療を変えたいと思いました。

もちろん、医師や看護師を攻めようというのではありません。看護師は患者に寄り添いたいが忙しく、指示だから仕方なく拘束手袋をはめている。医師は